

ハタノ・オーケストラの実態と功績

武石 みどり

明治期に西洋音楽が導入されてから本格的なオーケストラの演奏活動が開始されるまでには、種々の演奏団体によるさまざまな活動が見られた。本稿は其中で、大正14年に設立された日本交響楽協会、および大正15年設立の新交響楽団（現在のNHK交響楽団）の母体となったとされる（内田1976:371）ハタノ・オーケストラ^{注1}に焦点を当て、そのメンバーや活動状況、およびレパートリーについて資料を基に明らかにするものである。ハタノ・オーケストラが波多野福太郎・鏝次郎兄弟の主宰する演奏団体であることは知られているが、その活動場所は時とともに変化し、メンバーも流動的で複雑に入れ替わった。従って本稿では、いくつかの時期に分けてその実態を考察し、日本のオーケストラ揺籃期にこの演奏団体が果たした役割を明らかにする。

1. 波多野福太郎・波多野鏝次郎兄弟

ハタノ・オーケストラを率いたのは波多野福太郎とその実弟、波多野鏝次郎の兄弟である。

波多野福太郎（1890～1974）は芝中門前の八百屋の長男として生まれ、明治41年に東洋音楽学校（現・東京音楽大学）に入学し、明治44年3月に第2回生として卒業したと伝えられる。（内田1976:371）^{注2} 明治41年から44年にかけての東洋音楽学校の学内演奏会のプログラムには、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、声楽の曲目が見られ、福太郎もこれらの楽器を習得したであろうことが推測される。しかし、それにも増して重要なのは、明治43年8月から東洋音楽学校を用いて授業が開始された東京フィルハーモニー会管弦楽部である^{注3}。経済的支援を受けながら2年間管弦2種類の楽器を習得し、さらに演奏活動に従事できるという管弦楽部員の条件は、音楽で身を立てたいと望む者にとって魅力的であったに違いない。福太郎はおそらく明治43年8月から45年7月頃、東京フィルハーモニー会管弦楽部でアウグスト・ユンケル（ヴァイオリン）等の指導を受け、トランペットを習得したものと推測される^{注4}。

東洋音楽学校校長の鈴木米次郎は、卒業生に音楽の職場を与え、同時に海外の新しい音楽を見聞させるために、東洋汽船の横浜・サンフランシスコ航路に卒業生を船の楽士として送り込む道を開いた。最初の乗船は地洋丸で、大正元年8月4日に横浜を出港（『横浜貿易新報』T1/8/4）し、9日かけてホノルルに到着、さらに6日かけてサンフランシスコに到着という行程であった。航海中は、一等船客のソーシャル・ホールで5曲を1プログラムとして毎日2回演奏した。楽器編成はヴァイオリン、チェロ、クラリネット、トランペット、ピアノの5名で、最初の航海のメンバーは田中平三郎（Vn; 東洋音楽学校第2回卒業生）、高桑慶照（Vc; 第3回卒業生）、奥山貞吉（Cl; 第2回卒業生）、波多野福太郎（Tp）、斉藤佐和（Pf; 第2回卒業生）であった（東京音楽大学1972:21-23）^{注5}。船の楽士という仕事はかなり高給ではあるが体力的に過酷であるため、乗船メンバーは必要に応じて入れ替わったものと推測される。大正3年12月13日、東洋音楽学校第17回学友会練習会のプログラムには、「波多野鏝太郎」の名前でホルネットの演奏（曲目フアオレ作『パルムロウス』、カツセイ作『ベッシーポルカ』）が記載されている。この名前は福太郎とも鏝次郎とも取れる可能性があるが、演奏している楽器がホルネットであることから、おそらく福太郎を指すものと推測される^{注6}。これは母国に帰還中に母校の演奏会に出演したものであろう。大正5年3月31日には田中平三郎、河井磯次（東洋音楽学校第1回卒業生）、奥山貞吉、斉藤佐和と一緒に乗り組んでいた地洋丸が香港沖の無人島で座礁・沈没し、福太郎は無人島でト

ランペットを抱えて一夜を明かし、乗客・船員と共に救助を待つという一幕もあった（東京音楽大学 1972: 23）。

船の楽士達は、サンフランシスコでの停泊期間に、映画館やコンサートで新しい音楽や演奏方法を見聞する機会に多く恵まれた（波多野 1942: 101 - 102）。船の楽団がディナー演奏だけで片道に約 25 種類のプログラムを演奏したことを基に推測すると、午後の演奏や特別プログラムを加えれば 1 往復の航海に 100 種類以上のプログラムを演奏したと考えられる。マーチ・ワルツ・バレエ音楽・オペラ楽曲・フォックストロットの組み合わせを基本として、同じ曲ができるだけ続かないように配慮し、また復路ではサンフランシスコで新しく入手した楽譜を早速演奏するといった努力の結果、船の楽士を経験した者は幅広いレパートリーと新しい楽曲の知識、初見力、および柔軟な編曲技術を身に着けることとなった（武石 2005: 40 - 41）。

波多野鏞次郎（1893 ~ 1946）も兄と同様に家業を嫌って音楽の道を目指し、兄と共に勘当された。本人の回想では、日本音楽協会^{註7}で山井基清にヴァイオリンを師事し、その後東京フィルハーモニー会管弦楽部員となった（波多野 1942: 100）。東洋音楽学校の校友会名簿や、当時の学友会練習会・卒業演奏会のプログラムに鏞次郎の名は見当たらない。大正 2 年頃、東洋音楽学校から指名されてピアニストの澤田柳吉らと春洋丸に乗船、ハワイに到着する 1 日前まで船酔いで演奏不能という事態を経験しながら、約 6 年間船の楽士を務めた。またその間、大正 4 年 5 月 23 日には、山田耕作が率いる東京フィルハーモニー会管弦楽部^{註8}の第 1 回演奏会に参加した（波多野 1942: 100 - 102, 105）。

2. ハタノ・オーケストラの活動状況

2.1 金春館（大正 5 年～ 9 年）

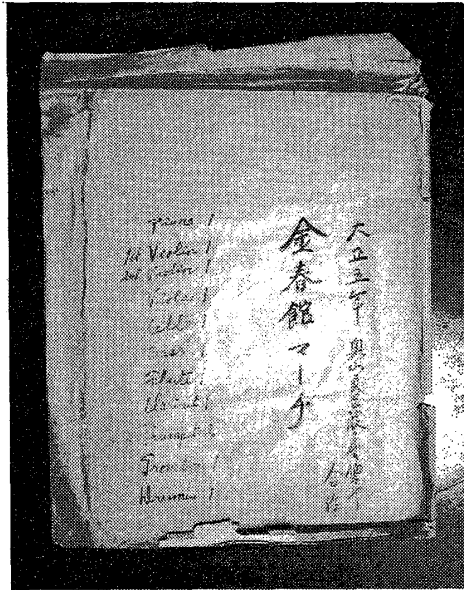
波多野兄弟がいつ船の楽士を辞めて陸に上がったのかは定かでない。これまでの文献では、京橋区加賀町（現在の銀座 7 丁目）にあった金春館^{こんばる}という活動写真館にハタノ・オーケストラが組織されたのは大正 7 年または 8 年とされてきた（紙 1957 ④⑤; 『映画史料』 16: 10; 内田 1976: 23）。しかし、波多野福太郎の回想（『マキシムバーの一夜』を金春館で上映した時に張り切って練習し、音楽をぴったり合わせて喜ばれた。内田 1976: 24）と徳川夢声の記述（『マキシム』というダンスを主とした 4 巻物は、金春館でハタノ・オーケストラがほとんど完全にやってのけた。徳川 1957: 45）に挙げられている映画『マキシム』が、大正 5 年 5 月に金春館で上演されている（荻野 1982: 17）ことから、本稿では、波多野福太郎の金春館への登場は大正 5 年にまで遡ることができると考える。

当時の映画雑誌の記事を見ると、大正 5 年の段階で金春館の無声映画伴奏の楽器編成はヴァイオリン、フルート、ピアノのみであったが、同年 11 月からこれにチェロが加わった（『キネマレコード』 37: 298; 42: 541; 内田 1976: 23）。金春館の音楽はすでにこの頃から好評を博しており、休憩奏楽としてオフエンバックの『ホフマン物語』より「美しい夜」[舟歌]の編曲、ワーグナーの『ローエングリン』の抜粋、ヴェルディ『椿姫』の抜粋編曲、スーザの『国民防衛軍マーチ（ナショナル・フェンシブルズ）』等が演奏されていたが（『活動之世界』 1/6: 159; 『キネマレコード』 39: 413; 44: 65）、常に波多野福太郎が中心に演奏していたわけではなく、演奏者は一定していなかったものと推測される^{註9}。大正 6 年頃からはさまざまな擬音効果を出す「形容音楽」も名物となり、「キッスの音までヴァイオリンで表した」という（波多野 1920; 徳川 1957: 45）。

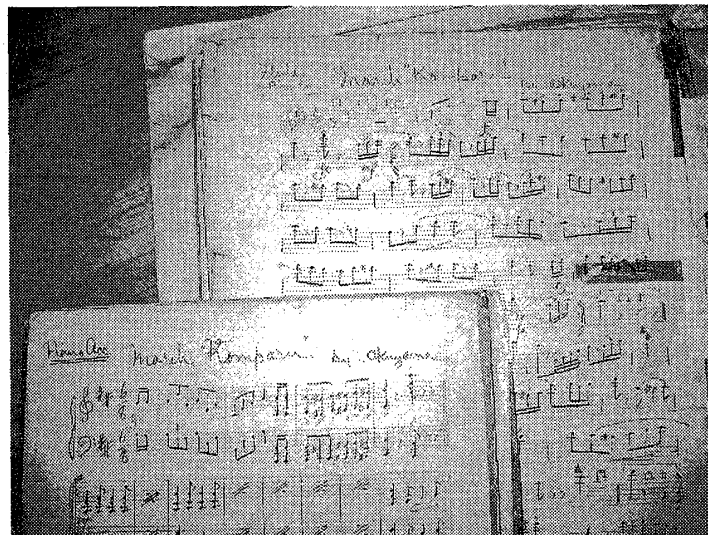
金春館の楽隊は大正 6 年 9 月には 5 名と記録されている（荻野 1982: 30）が、波多野鏞次郎が陸に上がったと思われる大正 8 年頃には 12 名程度に拡大された。大正 8 年 5 月の『金春週報』 113 には、映画の始まる前に『マーチ・コンパル』（オクヤマ作曲）、休憩奏楽として序曲『われ、もし王者なりせ

ば』（アダン作曲）の演奏があることが明記されている（日本映画テレビプロデューサー協会 1978: 13）。この『金春マーチ』は活動写真ファンの圧倒的な支持を得て、後年も懐かしく思い出される象徴的存在となった（『キネマ旬報』 20: 4; 『映画時代』 6/6: 37-39; 『映画史料』 16: 10-11）。この時の演奏に使われたパート譜によれば、楽器編成はヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、フルート、クラリネット、コルネット2、トロンボーン、ピアノ、打楽器の合計12名である（表1参照）。パート譜を入れた大型封筒（図版1）には「大正5年 奥山貞吉・波多野福太郎合作 金春館マーチ」^{注10}と記されているが、個々のパート譜（図版2）には March “Komparu” By T.Okuyama と記されており、奥山貞吉の作曲であることが確認できる。

【図版1】『金春マーチ』パート譜を入れた大型封筒



【図版2】『金春マーチ』パート譜



この時期の演奏レパートリーは金春マーチだけではない。休憩奏楽として、また映画上映中の間奏楽として、序曲やオペラの抜粋曲など、種々の楽曲が演奏・紹介された。大正8年10月の『活動雑誌』（5/10: 162-163）には、東洋汽船や日本郵船が横浜に入港するたびに輸入されるアメリカ流行の新曲楽譜を金春館で毎週演奏していると紹介され、楽士は楽長秦野[波多野]以下10名と報じられている。また、

当時の記事（キネマ旬報 29: 9）では金春館の楽団の名称が K.T.H.Orchestra と記されている（キネマ旬報 29: 9）が、一般にはこの頃から「ハタノ・オーケストラ」の名称で呼ばれるようになったと考えられる。大正9年6月の『キネマ旬報』（33: 9）においても金春館の管弦楽は12名の編成（表1）と紹介されており、館内でのヴァイオリン3、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、フルート、クラリネット、コルネット、トロンボーン、ピアノ、オルガン、打楽器（その他に時々オーボエやサクソフォンを使用）の配置図（図版3）が示されている。また、金春館の前に並ぶハタノ・オーケストラの写真（紙 1957④；大森 1986: 119）も、波多野兄弟を含む総勢12名である。

【図版3】『キネマ旬報』記事（大正9年6月）

○ Bass Piano Organ ○ Drum

○ Cello Cla. Trom.

○ Viola Flu. Viols. ○ Corn.

金春館
活動寫眞の調和を最も注意して最も早くから研究してゐる。その指揮の下に、金春館のオーケストラである。十二人の楽士が、用心をこめて練習して、一面聞き得るやうな曲目を、四、五日の練習で、一番聞き得るやうな曲目を、この頃、活動寫眞専用の楽譜を使つて、その効果が大である。

打 樂 器	鍵 盤 樂 器	金 屬 管 樂 器	本 管 樂 器	絃 樂 器
その他、ホルン、トロンボーン、サクソフォンを使用する。	ピアノ、オルガン	トロンボーン、クラリネット、コルネット	フルート、クラリネット、コルネット	ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス

【表1】ハタノ・オーケストラのメンバー

F=福太郎; K=謙次郎

	T8	T9	不明	T10	T11	T12	T13			
	金春マチ子	金春館	金春館	花月園	東洋キネマ	場所不明	帝国ホテル1	帝国ホテル2	帝国ホテル3	
Vn	2	3	波多野F 波多野K 安藤福太郎 福田宗吉	波多野F(指揮)	波多野K 2 前田磯	波多野K(指揮) 田辺千次 前田磯	波多野K	波多野K 黒柳守綱	波多野K 中村鑑次郎	
Va	1	1	中川三郎		2		浅井健之助			
Vc	1	1					高桑慶照	高桑慶照 寺田日瑗蔵	高桑慶照	
Cb	1	1	木下乙弥		1	大田集				
Fl	1	1	浅井?	寺尾誠一 岡村雅雄	宮田清蔵	宮田清蔵	寺尾誠一 宮田清蔵	宮田清蔵	宮田清蔵	
Cl	1	1	石川利三郎	2	岡本末蔵					
Sax				前野港達		岡本末蔵 前野港達				
Cornet/Tp	2	1		2 中村鑑次郎	1				中村鑑次郎	
Hr						徳原彦男 吉田民夫				
Tb	1	1	木島勇吉	2	大津三郎	大津三郎 相沢秋光				
Baritone				3						
Tuba				北川某						
Pf/Organ	1	1	加藤某	加藤福太郎	1 阿部万次郎	阿部万次郎 山本清一	阿部万次郎	阿部万次郎	奥山貞吉 和田肇	奥山貞吉
打	1	1		仁木他喜雄	1	高見友祥				
楽器不明			田山・金	1						
合計人数	12	12	12	20	13-14	14	6		6	
出典	パート譜	キネマ旬報記事	大森p.119	内田口絵①	波多野+活動画像	内田口絵②	帝国ホテルp.275	波多野1942	紙 1957⑦	

2.2 花月園（大正10年～11年）

大正10年1月、金春館が松竹の経営傘下に入ると同時にハタノ・オーケストラは金春館での活動を辞め、横浜鶴見の花月園に登場することとなった。波多野兄弟は仲が悪かったと伝えられており、徐々に活動の場を分けていくことになるが、花月園での活動に関しては福太郎が中心であったと思われる。（『音楽界』T10/4: 37; T11/7: 50-51; 『音楽年鑑』T12; T13）花月園では、昼はサロン・ミュージック、夜はダンス、日曜の午後はブラスバンドと、さまざまな形態で演奏した（中澤 1981: 200）。福太郎自身は当時の模様を「船時代にアメリカで買ってきたフォックス・トロットやワン・ステップ、ラグタイムの譜面をそのまま演奏した。アドリブをすることなど、まだだれも知らなかった。ドラムの仁木はのちに作曲家になったくらいで、私の譜を毎日持って帰っては研究していた。岡村は、サンフランシスコで新聞記者をしながら、夜クラブで内職にフルートを吹いていたのを、私が日本に連れてきた。」と回想して（内田 1976: 30）おり、船の楽士時代の経験を生かしながら「親方」として仲間を統率していたことがうかがわれる。波多野福太郎の遺族のもとに残された当時の写真（紙 1957 ⑤; 内田 1976: 口絵①）では、フルート2、クラリネット2、サクソ、ホルネット3、トロンボーン2、バリトン（ユーフォニウム）3、チューバ2、ピアノ、打楽器、コントラバス、楽器不明者1、指揮（波多野福太郎）の合計20名の吹奏楽編成（表1参照）が確認できる。この時サクソを担当した前野港造は、次のように回想している。「おやじ（福太郎）がアメリカからサクソを買ってきた。『これからはこの楽器がかならずやるからやってみろ』といわれ独習したが、クラリネットに比べると大分やさしく、すぐ吹けるようになった。金春館[金春館]に入ってすぐ『おやじ』にいわれて『船』に乗り、アメリカでさっそく自分用にサクソを買ってきた。軍楽隊ではすでに使っていたが、ジャズを演奏したのは日本では私が最初だった。」（内田 1976: 26）

波多野福太郎は花月園での活動が10ヵ月ほどで終わったと述べている（内田 1976: 30）が、当時の資料（『音楽界』T11/7: 40-41, 50-51; T11/8: 39-40）では、大正11年の6月と7月にも演奏が記録されている。

2.3 東洋キネマ（大正11年～13年）

大正11年1月から神田の東洋キネマが開館し、弁士・徳川夢声らと共にハタノ・オーケストラが伴奏を務めることとなった（徳川 1957: 93）。『キネマ旬報』（88: 14）には、東洋キネマの広告に「ハタノ大管弦楽団」と謳われている。波多野福太郎が花月園での活動の中心となったのに対して、東洋キネマでの活動の中心は鎌次郎であったと考えられる。当時の資料（『活動画報』7/6: 38）では、ヴァイオリン3、チェロ2、コントラバス、フルート、クラリネット、ホルネット、ドラム、ピアノ、オルガンと楽長（波多野鎌次郎）の計13名（休憩演奏はマスネの管弦楽組曲第7番『アルザスの風景』より抜粋編曲）と紹介されており、鎌次郎自身の回想（波多野 1942: 103）でも上記にトロンボーンを加えた計14名の編成（表1）であった。また、『日本のジャズ史』で「大正12年のハタノ・オーケストラ」として紹介されている写真（内田 1976: 口絵②）には、鎌次郎を中心に合計14名が写っており、全員の名前が照合されている（表1）。さらに、大正12年3月の東洋キネマのプログラム『Orient News』2/14では、休憩演奏としてカザヌーブ作曲『ヴェニスの風景』からの抜粋が挙げられている（日本映画テレビプロデューサー協会 1978: 146）。

波多野鎌次郎は「東洋キネマ管弦楽長」として「広く民衆に音楽趣味を普及し音楽的教養を施すというような点から考えれば、可なり重大な使命を持って居る」と考え、「常設館でサンデー・コンサートを催すような機運を一日も早く招来したい」という意気込みを表明した（『活動画報』7/6: 43）。そし

て、この夢が実現した様子は次のように回想されている。「映画1本とサンデー・コンサートとして音楽をやった。そのとき楽員も三十名くらいになって、音楽のプログラムは、ドヴォルジャックの『新世界』、あとはモーツァルトのものとかズッペなどを演奏して、大入り満員であった。」(波多野 1942: 103 - 104) 鎌次郎は大正12年と13年の『音楽年鑑』に「神田神保町東洋キネマ館オーケストラ指揮者」として記載されており、ハタノ・オーケストラはこの時期レコード録音(ビクターより『スパニッシュ・セレナード』『オリエンタル・ダンス』『蛇と蜥蜴』『ミステルオソ』『グローブ・ツロッターズ』等の楽曲:『読売新聞』T12/4/15:7)や演奏旅行(『音楽界』T12/8:103)等、精力的に活動した。

2.4 帝国ホテル(大正13年~)

大正12年に帝国ホテルで東京シンフォニー・オーケストラ(ジャケス・M・ゲルスコヴィッチ指揮)が組織された際、波多野鎌次郎は楽員の編成の面で協力し、オーストリア人、アメリカ人やロシア人のメンバーに日本人を加えた編成として、日本人メンバーにはハタノ・オーケストラから多くの人員を送り込んだ(波多野 1942: 104)。大正12年4月12日の第1回演奏会プログラムには波多野鎌次郎の他、福田宗吉、前田^{たまき}璣、中村鉦次郎、寺尾誠一、宮田清蔵、岡村雅雄、岡本末蔵、吉田民雄らの名を見出すことができる(秋山 1966: 368; 表3)^{注11}。

東京シンフォニー・オーケストラが大正12年9月の関東大震災によって解散となった後、大正13年にはハタノ・オーケストラが帝国ホテルの専属となった。契約交渉時点でのメンバーは、波多野鎌次郎、阿部万次郎(ピアノ、サクソ)、宮田清蔵(フルート、ドラム)、浅井健之助(ヴァイオリン、ドラム)、高桑慶照(チェロ、バンジョー)、寺尾誠一(ベース)の6人であった(帝国ホテル 1990: 275)が、その後、鎌次郎以外のメンバーは時に応じて入れ替わった。(表1 波多野 1942: 105; 紙 1957⑦)帝国ホテルでは6人~10人(大森 1986: 143)という小編成であったため、一人の人間が複数の楽器を担当したと推測される。帝国ホテルでの活動は波多野鎌次郎が中心となり、以後兄の福太郎とは完全に分離して活動することとなった。大正14年には開局まもない東京放送局(JOAK)にも出演し、5月24日にはレハールのワルツ『金と銀』、グルックの『ガヴォット』、グラナドスのスペイン舞曲『ホタ』他、6月28日にはタイケの行進曲『旧友』、スッペの『美しきガラテア』序曲、ブラームスの『ハンガリー舞曲第5番』等の演奏が放送された(NHK放送博物館所蔵資料)。「帝国ホテルのハタノ・オーケストラ」は、「映画のハタノ・オーケストラ」とは別に、昭和20年の終戦時まで演奏を続けた(内田 1976: 25)。

波多野鎌次郎が東洋キネマから帝国ホテルへと活動場所を移し独立した時期、大正12年以降に兄の福太郎の活動を示す資料は少ない。但し、大正13年5月に目黒キネマのプログラムでハタノ・オーケストラが福太郎の指揮によりレオ・オームラー作曲の組曲『クレオパトラ』を抜粋演奏(<http://www.asahi-net.or.jp/~ia6t-tkhs/meguro.htm>)したこと、さらに大正15年9月の芝園館のプログラムで芝園オーケストラの指揮者として福太郎(『ホフマン物語』より「舟歌」と『ラ・パロマ』)と前田璣の名前(ポンキエルリ作曲『ジョコンダ』より「時の踊り」)(<http://www.asahi-net.or.jp/~ia6t-tkhs/shibazonokan.htm>)が挙げられていることから、福太郎は昭和の初めまで映画伴奏の仕事の続けたものと推測される。

3. メンバーの状況

3.1 メンバーの来歴(表2)

内田 1976: 25 に挙げられているハタノ・オーケストラの主要メンバー^{注12}を、来歴別に整理すると表

【表2】メンバーの出自

	東洋音楽学校	少年音楽隊	浅草・映画	その他
Vn	波多野福太郎(M44卒)☆☆ 波多野謙次郎(中退?)☆☆ 前田璣(T6卒)☆	田辺千次(三越M42入) 黒柳守綱(三越T9入)	安藤福太郎	福田宗吉(東京音楽学校)☆
Va				浅井健三郎 中川三郎
Vc	高桑慶照(M45卒)☆			寺田日瑗蔵(宝塚音楽学校) 木下乙弥(海軍)
Cb		寺尾誠一(三越M44入)		大田集
Fl		宮田清蔵(三越M42入)☆ 高麗貞道(松坂屋T8入)☆		岡村雅雄(アメリカ)
Cl			岡本末蔵★ 前野港造☆☆	石川利三郎
Sax Cornet		中村鉦次郎(松坂屋M44入)	篠原茂男★	
Tb				吉田民夫 大員 木島勇吉 北川嘉納(海軍) 大津三郎(海軍)☆ 相沢秋光 加藤福太郎
Pf/Organ	奥山貞吉(M44卒)☆☆ 山本清一(T8卒)☆ 和田肇(T13卒)	阿部万次郎(三越M42入)		
打				高見友祥 仁木他喜雄(横浜六崎)☆

☆=船の楽士経験者

★=大日本音楽団幹部

【表3】他の演奏団体への参加状況

	T12	T14	T15	昭和1~20年(帝国ホテル、新響以外の組織への参加)	
	東京シンフォニー	日露交歓	日本交響楽協会	新響	
Vn	Y[K].Hatano S.Fukuda T.Mayeda K.Nakamura	波多野謙次郎 安藤福太郎 田辺千次 前田璣	安藤福太郎 福田宗吉 田辺千次 前田璣 黒柳守綱 高桑慶照	波多野福太郎 福田宗吉 田辺千次 前田璣 高桑慶照	波多野福太郎:コロナorch、PCL orch、東宝音楽部(Vn、打楽器) 安藤福太郎:日米ダンスホール(タンゴ) 福田宗吉:コロナorch、日活トーキー用作曲家 田辺千次:コロナorch 前田璣:東京放送管弦楽団、ポリドールorch 黒柳守綱:ポリドールorch、コロムビアダンスorch、東宝音楽部 高桑慶照:PCL orch、東宝orch、NHK名古屋orch、CBC放送orch 中村鉦次郎:コロナorch
Va		中村鉦次郎	中村鉦次郎	中村鉦次郎	
Vc		北川嘉納 寺田日瑗蔵			寺田日瑗蔵:松竹座orch
Cb		木下乙弥			
Fl	S.P[T]erao S.Miyata M.Okamura	寺尾誠一 宮田清蔵 岡村雅雄	寺尾誠一 宮田清蔵(picc) 岡村雅雄	寺尾誠一 宮田清蔵 高麗貞道	宮田清蔵:コロムビアダンスorch 岡村雅雄:ビクターorch、東京放送管弦楽団 高麗貞道:コロナorch、ポリドールorch
Ob		阿部万次郎	阿部万次郎	阿部万次郎	
Cl	S.Okamoto		岡本末蔵	岡本末蔵	岡本末蔵:コロナorch、PCL orch、東宝音楽部、東京放送管弦楽団 前野港造:松竹座orch、ジャズバンド 高見友祥:松竹座orch、コロムビアダンスorch、ジャズバンド
Sax					
Hr	K[T].Yoshida	吉田民雄			
Tb			北川嘉納 大津三郎	北川嘉納	
Pf					山本清一:東京放送管弦楽団 奥山貞吉:NHK、コロムビアの作・編曲者 和田肇:PCL orch、東京放送管弦楽団
打		大津三郎 仁木他喜雄	仁木他喜雄	仁木他喜雄	仁木他喜雄:ジャズバンド、コロムビアの作・編曲者

2のようになる。この表から読み取れることは、波多野兄弟が関係した東洋音楽学校のみならず、三越少年音楽隊、松坂屋少年音楽隊、浅草派、海軍軍楽隊等、さまざまな音楽教育機関の出身者が混じっていること、船の楽士を経験した者が多く含まれること、そして大正3~4年頃に設立された職業音楽家の団体「大日本中央音楽団」の幹部(大森 1986: 101-103)も多く見られるということである。彼らは、このように異なる出自でありながら、船の楽士や映画伴奏の体験を通して幅広いレパートリーと適応力

を身に着け、社会の要請に応える音楽を作り出すために、目的に適った楽団を柔軟に組織したと推測される。

3.2 日露交驩交響管弦楽大演奏会から新響の設立まで（大正14年～15年）（表3）

大正14年4月に開かれた日露交驩交響管弦楽大演奏会から、大正15年1月の日本交響楽協会第1回演奏会、さらには同年10月の新交響楽団の発足という本格的なオーケストラ始動の機運の高まりの中で、これまで映画やサロン音楽、あるいは船の楽士として活動してきた奏者たちのうち、特にクラシック音楽に強い願望を持つ者たちがその流れへと参入した。フルートの宮田清蔵は次のように回想している。「あの頃、帝国ホテルのハタノ・オーケストラで演奏をしていたが、交響楽の演奏に魅力があって、波多野鏝次郎さんに退団の話をしたところ、波多野さんは『あなたには最高給（230円）を支払っているのに何でやめるのか』と言われたが、結局退団させてもらい、日本交響楽協会に入ったのです。その頃の給料は80～90円であったと思います。それでも高度な楽曲の演奏にあこがれていた時代ですからね」（大森1986:151）

表3に示したとおり、ハタノ・オーケストラのメンバーの多くがこれらの重要な動きに参加し、日本交響楽協会と新交響楽団の中核メンバーとなった。波多野鏝次郎は、日露交驩交響管弦楽大演奏会には出演したが、日本交響楽協会と新交響楽団には結局入団せず、「帝国ホテルのハタノ・オーケストラ」を率いてサロン・ミュージックを中心に演奏する道を選んだ。反対に波多野福太郎は、日露交驩交響管弦楽大演奏会と日本交響楽協会には参加しなかったが、新交響楽団の発足時にヴァイオリン奏者として入団し、「映画のハタノ・オーケストラ」を徐々に退き楽団奏者の一人として演奏活動を続けた。

3.3 主なメンバーのその後（表3）

新交響楽団に入団した者たちは、その後昭和6年のコロナ事件等で行き先が分かれ、新交響楽団（のちのNHK交響楽団）のほか、コロナ・オーケストラ（昭和6年）、PCLオーケストラ（昭和8年）、東京放送管弦楽団や東宝音楽部（昭和12年）等、さまざまな組織で活動することとなった。コロナ・オーケストラと東京放送管弦楽団はラジオ放送、PCLオーケストラはトーキー映画の録音、そしてポリドールやビクターのオーケストラはレコード録音のために、ジャズや軽音楽、歌謡曲等さまざまな曲種を演奏した。一方、新交響楽団に残ったメンバーも、決してクラシックだけを演奏していたわけではない。「オリエンタル・オーケストラ」「パレス・オーケストラ」の名で軽音楽、「JOAKジャズ・バンド」の名でジャズ・ソングを演奏し、阿部万次郎、前田璣、仁木他喜雄等は新響のメンバーとしてジャズの演奏でも活躍した（内田1976:87-93）。

ハタノ・オーケストラのメンバーの中には、ジャズの分野でパイオニアとなった者もいる。前野港造は松竹座オーケストラやNHK大阪のオーケストラに所属したのち、井田一郎とジャズ・バンドを組んで多くのダンスホールに出演し、日本のジャズ・サクスの嚆矢となった（内田1976:26,369）。高見友祥も、宝塚オーケストラで知り合った井田一郎と共にコロムビア・ジャズバンドで活動（中澤1981:202）し、前野港造と共に日本のジャズ・サクスの長老的存在となった（内田1976:377）。

その他に、作曲や編曲の分野での活躍も注目に値する。奥山貞吉はNHKとコロムビアで作曲・編曲を担当、仁木他喜雄は新交響楽団に所属するかたわらコロムビアの専属編曲者としてジャズ・ソングの編曲を得意とするようになった（内田1976:372,390）。

結論 ハタノ・オーケストラが果たした役割

以上から、ハタノ・オーケストラとそのメンバーが日本のオーケストラ運動の揺籃期に果たした役割を下記のようにまとめることができる。

- ① ハタノ・オーケストラは大正8年頃から常雇いの楽団として約12人の編成で演奏し、活動写真館、ダンスホール、ホテル等、活動場所とメンバー、編成をさまざまに変えながら、小アンサンブル、サロン・オーケストラ、あるいは吹奏楽の演奏の普及と定着に貢献した。船の楽士として得た見聞を基にして演奏方法・編曲方法の点で新風を送り、さまざまな出自の奏者が混淆する中で演奏のレベル・アップに大きな役割を果たした。
- ② 船の楽士仲間から得られる新しい音楽情報に基づき、幅広い曲種とレパートリーを導入・紹介した点で大きな役割を果たした。特にジャズを紹介した功績は大きく、メンバーのうちの数名はジャズ分野でパイオニア的な役割を果たした。
- ③ 大正14年から15年にかけて、ハタノ・オーケストラのメンバーは日本交響楽協会、および新交響楽団の設立時に中核メンバーとなり、本格的なクラシックの交響楽団の定着に貢献した。
- ④ 昭和初年代にレコードやラジオ、トーキー映画等の新しいメディアが普及してさまざまな曲種が必要とされる状況にあって、ハタノ・オーケストラのメンバーは、多様な曲種の演奏や編曲分野で各々活躍の道を見出した。現代から見れば「ジャンル横断的」な豊かな演奏経験と柔軟な対応力を有していたことは、オーケストラ揺籃期の楽士達の大きな特徴として注目に値する。

注

1. 波多野オーケストラ、ハタノ・バンドとも呼ばれ、どの時期にどの呼称で活動していたかは確定しがたい。紙1957②③④では船の楽士時代にもハタノ・バンドの呼称を用いているが、本稿では金春館以降の活動を「ハタノ・オーケストラ」の活動として扱うこととする。
2. 但し、東洋音楽学校の入学・在籍・卒業の記録はすべて消失している。現存する第2回卒業演奏会プログラムとそこにはさみこまれた卒業生一覧（東京芸術大学附属図書館所蔵 小山作之助プログラム・コレクション）には、波多野福太郎の名前は無い。しかし、『東京音楽大学65年史』（東京音楽大学1972）には波多野福太郎自身が第2回卒業生として寄稿し、校友会名簿（東京音楽大学校友会2005）にも第2回卒業生として記載されている。
3. 東京フィルハーモニー会とは、東京音楽学校教授のハインリッヒ・ヴェルクマイスターと東洋音楽学校の設立者鈴木米次郎が岩崎小弥太等の協力を得て設立した組織で、音楽普及のために毎年6回のコンサートを予約会員に提供するものである（『音楽界』M43/5:46-47）。明治43年4月3日の発会式、6月5日の第2回演奏会と、東京フィルハーモニー会の活動が順調に始動すると、鈴木と岩崎の計画は「優秀なオーケストラ楽団員の育成」という新しい段階に進み、明治43年7月に管弦楽部員の募集が始まった（『読売新聞』M43/7/12:5; 『東京日日新聞』M43/7/15:6; 『音楽世界』M43/8:11）。管弦楽部員は7円乃至15円の補助を受けながら、2年間アウグスト・ユンケル（Vn）とヴェルクマイスター（Vc）の指導を受けることとなっており、8月1日より東洋音楽学校で授業を開始、8月中には当初15名を予定していた入隊者が20名を超え、9月からは二組に分けて教授すると伝えられている。入部資格は尋常小学校卒業以上、16歳以上25歳以下で、1人で管弦2種類の楽器を修得、入部後3ヶ月間技術練習に励み、修学の見込みがあると認められた者は2年間学資を受けながら楽器を修得、卒業後3年間は指定の奏楽に従事することになっていた（『音楽界』

M43/8: 60)。

4. 但し、東京フィルハーモニー会管弦楽部の団員について東洋音楽学校第6回卒業生の保坂連治が記した記録には、波多野兄弟の名はいずれも含まれていない(東京音楽大学 1972: 20)。内田 1976: 371 では、波多野福太郎はホルネットを海軍軍楽隊の西郷直袈裟に学んだとしている。
5. 東京音楽大学 1972: 22 では、トランペット奏者は海軍軍楽隊出身者で氏名不詳としているが、波多野福太郎に取材して作成された紙 1957 ②と内田 1976: 16 では、トランペット奏者を波多野福太郎としている。第1回乗船楽士の5名のうち、波多野以外の4名が東京フィルハーモニー会管弦楽部でそれぞれの楽器の指導を受けていた(東京音楽大学 1972: 20)という事実も、波多野福太郎が同部に所属していた可能性を強く示唆している。
6. 同じ第17回校友会練習会には、福太郎と同じ第2回卒業生の清水(蒲池)剛蔵がヴァイオリン独奏で出演している。
7. 本人の回想では、「一ツ橋の音楽学校」と述べているが、この時期に山井基清が教えていたのは、神田区錦町3丁目11番地に所在していた女子音楽学校(男子生徒用には日本音楽協会)であった(『音楽界』M42/4: 35; M42/7: 36-37; M42/8: 27.)。
8. 鈴木米次郎と岩崎小弥太の意見の不一致により、東洋音楽学校で開始された東京フィルハーモニー会管弦楽部は明治45年4月に解散された(『音楽界』45/4: 73)。その後、岩崎小弥太はドイツ留学から帰国した山田耕作を指揮者として立て、大正4年5月から東京フィルハーモニー会管弦楽部の定期演奏が開始された(『東京朝日新聞』T4/5/24: 5)。
9. 大正6年5月の記事では、Komparu Orchestraのメンバーとして、安藤・渡辺(Vn)、相沢(Vc)、[Shinowara?] (cornet)、村田(Pf)の5名の名前が見られる(『キネマレコード』47: 223)。また大正7年12月の記事では金春館の楽長名は浅井となっている(『活動画報』2/12: 20)。まだこの段階では波多野福太郎は金春館に常勤の状態ではなかった(あるいは船の楽士を完全には辞めていなかった)と思われる。
10. このパート譜はもともと波多野福太郎の遺族のもとにあったもので、パート譜を入れた大型封筒はパート譜とは別の筆跡で記されている。大正5年という年号が書かれているが、先に考察したとおり、資料では大正5年の段階で金春館には3~4名の楽員しかおらず、12名の編成での演奏は不可能であった。従って、大正5年という年号は金春マーチの作曲年を示すのではなく、波多野福太郎が金春館と関わり始めた年を示すのではないかと思われる。
11. このうち岡村、岡本、吉田の3名は「所属不明」と記されている。またこのプログラムではチェロのT.MatsubaraとコントラバスのH.Kawaguchiもハタノ・オーケストラ所属とされているが、この二人は他の資料・文献ではハタノ・オーケストラとの関係が言及されていないため、本稿ではメンバーとして取り扱わない。
12. 大森 1986: 150ではクラリネット奏者の辻井富造とトランペット奏者の佐伯憲二の出身を「映画のハタノオケ」と記しているが、波多野 1942、紙 1957 および 内田 1976 (波多野福太郎に取材)では、辻井と佐伯の名はハタノ・オーケストラのメンバーとして言及されていない。本稿では後者に従い、辻井と佐伯の両者をメンバーとして取り扱わない。

参考文献

秋山 龍英

1966 『日本の洋楽百年史』 東京：第一法規出版

内田 晃一

1976 『日本のジャズ史 戦前・戦後』 東京：スイング・ジャーナル

大森 盛太郎

1986 『日本の洋楽』第1巻 東京：新門出版社

荻野 寧

1982 『西銀座・金春館小史』 横浜：常山源太郎

紙 恭輔

1957 「あのころのジャズ」②～⑦ 『東京新聞』1957/10/5 夕刊: 5; 1957/10/7 夕刊: 5; 1957/10/8 夕刊: 5; 1957/10/9 夕刊: 5; 1957/10/10 夕刊: 5; 1957/10/11 夕刊: 5.

近藤 滋郎

2003 『日本フルート物語』 東京：音楽之友社

武石 みどり

2005 「研究ノート 明治・大正期の東洋音楽学校——演奏に関連する記録・資料」『東京音楽大学研究紀要』29: 27 - 48.

帝国ホテル（編）

1990 『帝国ホテル百年史』 東京：帝国ホテル

東京音楽大学（編）

1972 『東京音楽大学 65 年史』 東京：東京音楽大学

東京音楽大学校友会（編）

2005 『東京音楽大学校友会名簿』 東京：東京音楽大学校友会

徳川 夢声

1957 『くらがり二十年』 東京：春陽堂書店

中澤 まゆみ

1981 「日本人がジャズを口ずさんだ日」『潮』271: 180 - 211.

日本映画テレビプロデューサー協会（編）

1978 『プログラム映画史 懐かしの復刻版：大正から戦中まで』 東京：日本放送出版協会

波多野 鏖次郎

1942 「民衆音楽の時代を語る」『音楽の友』2/10: 100 - 105.

波多野 福太郎

1920 「形容音楽の目的」『活動雑誌』6/1: 176 - 177.

松山 善三

1995 『提琴有情 日本ヴァイオリン音楽史』 東京：レッスンの友社

付記

本稿の作成に当たっては、波多野綾子様、波多野直康様、勝又貞子様、矢向繁雄様に貴重な情報と資料を提供していただきました。また、資料の収集と整理にあたっては助手の安間良子さんにご協力をいただきました。ここに記して、皆様に心より御礼申し上げます。

（科学研究費・基盤研究（C）18520098 による研究）